

3月11日に起こった東日本大震災で多くの死者・行方不明者が出た。それから1カ月たち、メディアでは、「がんばろう、日本」と、人々を復興へと駆り立て、自粛ムードは経済を立て直すことを阻害し、復興もできなくなるという言説が流されるようになっていく。現在の資本主義システムとしてはそう言わざるをえないのだろうが、それによって取り残されるのは、悲しみのさなかの遺族ばかりではなく、なによりも死者なのではないか。死者を「弔う」時間も奪い、死者を取り残さないと維持できないシステムこそが、私たちが生きているシステムなのだ。

死者を「弔う」こととは、一人一人の死者の単独性＝代替不可能性（その代替不可能性は死によって露わになる（渡辺2009参照））を保持しつつ、死者と生者の共同体のなかの役割関係のなかに死者を置き直すことで、代替可能な役割からなる社会をも維持していく実践なのではないか。

私たちが行っている共同研究「生の複雑性をめぐる人類学的研究：『第四世界』の新たな記述にむけて」は、「貧困」や「差別」や「移民」や「マイノリティ」などといった、一般化された概念では掬いとれないような経験をどのように記述できるのかという「問い」から始まった。その問いは、次のような問題意識によるものだった。すなわち、一般化されたカテゴリーを用いた、全体からの意味づけを刻印されている「第四世界」において、そのような「意味づけ＝全体化」に還元されない「生の複雑性」によって現れる多面的な状況を「第四世界的状況」と呼ぶとしたなら、そのような「複数にして単独の出来事・経験」を、「語りえぬもの」とか「還元不能」とか「他者性」といった出来合いの否定的表現によって表わすのではなく、そのアクチュアリティを具体的に捉えるにはどうすればいいかというものである。

私自身はこの答えの方向をレヴィ＝ストロースによる「真正性の水準」の区別に求めている。それは、5,000人の人間は、500人と同じやり方ではひとつの社会を構成することはできない、という単純な区別である。レヴィ＝ストロースは、5,000人による社会を「非真正な（まがいもの）社会」と呼び、そこでは、「われわれの他人との関係は、折にふれての、断片的なもの以外、もはや、あの包括的な経験、つまり、一人の人間が他の一人によって具体的に理解されるということにもとづいてはいない。われわれの人間関係は、かなりの部分、書かれた資料を通しての間接的な再構成にもとづいている」（レヴィ＝ストロース1972：407）と述べている。つまり、「一人の人間が他の一人によって具体的に理解される」真正な社会においても、もちろん役割やカテゴリーは働いている。けれども、対面的関係を持続し、記憶を共有していくうちに、そのカテゴリーや役割はぼやけていき、それらの束にも還元されない、いわば「裸形の顔」がそこに現れてくる。そのような関係における行為こそが一回性のアクチュアリティをつくり出しているのである。それに対して、非真正な社会においては、人は一般化されたカテゴリー

や役割——すなわち代替可能で比較可能なもの——へ還元される。その還元によってリアリティの構成が可能となるが、アクチュアリティは抜け落ちる。

いいかえれば、真正な社会では、いわば、リアリティの裏にアクチュアリティがツねに貼りついているけれども、非真正な社会では、アクチュアリティが剥がれ落ちている。このリアリティとアクチュアリティの区別（木村1994参照）は、別のところ（小田2009；2010a；2010b）で述べたように、「一般性－特殊性」の軸と「普遍性－単独性」の軸に重なる。リアリティは、出来事や経験を一般化されたカテゴリーや役割に還元することによって再現可能な特殊性として物語的に構成されたものであるが、アクチュアリティはそのような還元によって消えてしまう単独の出来事としてある。

アクチュアリティと「普遍性－単独性」との結びつきを理解するには、レヴィ＝ストロースにおける「真正性の水準」を、彼の歴史論と結びつけるのが手っ取り早いかもしれない。レヴィ＝ストロースはマルクス主義や歴史主義を批判しているが、それは、それらが還元不可能な出来事としての歴史を、通時的なコードを用いて、線形的な物語に還元してしまうからである。レヴィ＝ストロースは次のように言っている。「我々が確かなものとして認めることしかできぬ、還元不能な事件からなる歴史と、一種の抽象的な時間性とのある種の同一視——私にはこれは誤りだと思われます」（レヴィ＝ストロース、オジェ、ゴドリエ1985：193）。「あらゆるシステムは——言語学のものであれ、他のものであれ——それ自身に対して平衡を保てない状態にあるのです。これこそがその内的な力学の原動力なのです。しかし、私の立場としましては、正確にはそこには歴史はありません。いずれにせよ歴史全体はそこにはないのです。それは、我々が諸々の構造の進化について、ジャーゴンを使って通時的と呼ぶ次元であり、それについては誰も異議を唱えてはおりません。けれども、そのプラスアルファとして、別のものが存在しており、これを我々は還元してしまうことはできないでしょう。恰も頭を下げねばならぬ絶対的な何かのように、歴史はそこで我々に現前しているのです」（レヴィ＝ストロース、オジェ、ゴドリエ1985：195）。

つまり、レヴィ＝ストロースは、「複数にして単独」の出来事からなる還元不可能な歴史こそ「歴史」であるとして、それと、個々の出来事や個人を一般化されたカテゴリーや役割カテゴリーに還元してしまう、通時的で均質な時間にそった物語としての歴史を区別している。そして、その還元できない「プラスアルファ」こそ、ここでアクチュアリティと呼んでいるものであるが、それが現れるのは、単独の出来事がそもそも一般化された概念やカテゴリーでは捉えられない、いわば通時的な諸進化の場ないしは地として、それらの進化を生み出しているからであり、その出来事の起こる場＝地は、還元不可能な普遍性をもっているのである。

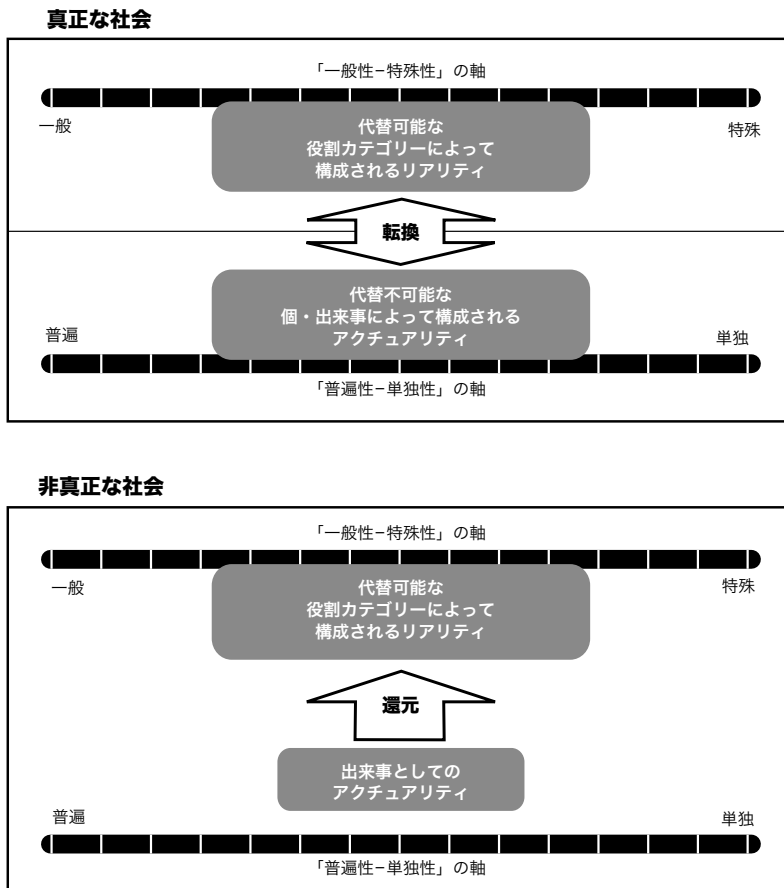


図 真正な社会と非真正な社会。

このように「普遍性-単独性」の軸と結びついたアクチュアリティは、具体的な他者への働きかけとその応答によるものであり、真正な社会にしかない。それに対して、非真正な社会においては、社会関係はもはや一人の人間が他の一人によって具体的に（比較不可能な複雑性を残したまま）理解されるというやり方にもとづいてはならず、かなりの部分、書かれた資料やメディアを通しての間接的な再構成にもとづいている。この再構成においては、真正な社会における「あの包括的な経験、つまり、一人の人間が他の一人によって具体的に理解される」ときの、「普遍性-単独性」の軸における生の複雑性（「裸形の顔」として現われる包括的なものとしての普遍的で単独的な生の経験）は縮減・消去されて、規格化され単純化された一般性、比較可能なもの、つまり固定された役割カテゴリーへと還元される。いいかえれば、非真正な社会は、「一般性-特殊性」の軸への還元によってなりたつ。したがって、再現不能な単独の出来事のアクチュアリティを捉えるときには「真正性の水準」の区別が重要となるのである。

しかし、そのことは、真正な社会がアクチュアリティのみからなる社会であることを意味しない。すでに述べたように、真正な社会にも役割カテゴリーはあるし、その役割間の相互作用によるリアリティの構成は基本的なものとなっている。けれども、真正な社会においては、その役割カテゴリーに還元できないアクチュアリティが問題となっており、役割カテゴリーをいわば「はみ出し」してしまう。役割カテゴリーによるリアリティの裏に貼りついた代替不可能で比較可能な単独性すなわちアクチュアリティが現れるからである。あるいは、

真正な社会では、役割カテゴリーや比較可能な個性がつねに単独性と交替し、リアリティがつねにアクチュアリティへと転換しうるのだと言ってもいい(図を参照)。

冒頭の話題に戻せば、「死者を弔う」という実践こそ、その転換を行うものであり、「語りえぬ」アクチュアリティを記述するとは、そのような転換のやり方を記述することに他ならない。

【参考文献】

- 小田亮 2009 「二重社会」という視点とネオリベラリズム 『文化人類学』 74 (2): 272-292。
- 2010a 「二重社会論、あるいはシステムを飼い慣らすということ」 『日本常民文化紀要』 28: 226-256。
- 2010b 「真正性の水準と『顔』の倫理」 小田亮編『グローカリゼーションと共同性』 pp. 245-274 成城大学グローバル研究センター。
- 木村敏 1994 『心の病理を考える』 岩波書店。
- レヴィ=ストロース、クロード 1972 『構造人類学』 川田順造ほか訳 みすず書房。
- レヴィ=ストロース、クロード、マルク・オジェ、モーリス・ゴドリエ 1985 『人類学、歴史、イデオロギー』 『現代思想』 13(4): 188-201。
- 渡辺公三 2009 「森と器」 『アフリカのからだ』 pp. 319-348 言叢社。

おだまこと

成城大学文芸学部教授。専門は社会人類学。著書に『構造主義のパラドクス』（勁草書房 1989年）、『構造人類学のフィールド』（世界思想社 1994年）、『レヴィ=ストロース入門』（筑摩書房 2000年）、編著に『グローカリゼーションと共同性』（成城大学グローバル研究センター 2010年）など。